

令和 6 年度国立障害者リハビリテーションセンター学院
学校関係者評価委員会報告

各評価項目について

1 教育理念・目的・人材育成像
○本分野（項目 1～4）について、長年これまで継続されているところで、特に追加、変更はなく、昨年度と同評価は適切な策定であります。
2 学院運営
○「教務等の運営組織や意思決定機能、規則等により明確化され有効に機能しているか」（項目 7）の評価項目については、昨年度、“学科教育の特色に適切に対応し、評価の再現性の高い項目となるよう、学院側で改めて検討を継続されたい。”との指摘を受け改めたものであり、今回の修正に合意します。
○「教育活動等に関する情報公開が適切になされている」（項目 9）については、コロナ禍で情報公開等について制約があった後に、5 類感染症になってからは今後、情報公開の方法に関して、ホームページの表示の仕方、オープンキャンパスや幅広い手段で広報していくという改善の余地があるということから、評価を「3」とし改善に向けた取組が期待されます。
3 教育活動
○本分野にあった「関連分野の関連施設、関係団体との連携」、「関連分野における業界等との連携」と「職業教育に対する外部関係者」に関わる評価項目（旧項目）については、昨年度、“関係施設・団体等との連携によるカリキュラム作成・見直し（旧項目 15）、職業教育に関する外部関係者からの評価（旧項目 18）、関連分野における業界等との連携における教員確保（旧項目 22）などについては、これらが当学院の学修特徴上、教育評価として妥当な項目であるか、継続審議の必要性について承認されました。”を受け検討した結果として、今回の削除に合意します。
○退学率は、過去 5 年一定であれば、カリキュラム内容の改善が必要と考えます。学生募集時の説明と応募による合意に基づいた教育運営が期待されます。
4 学修成果
○国家資格合格率が 95.0%の言語聴覚学科や 100%の義肢装具学科、手話通訳学科の手話通訳技能認定試験について、いずれも合格率の高さが評価されます。
○教官会議、教官研修会は、社会状況、学生の状況に応じ教員としてファカルティ・ディベロップメントによる研鑽が顕著であり、さらなる発展が期待されます。
5 学生支援
○学生支援の活動状況を高く評価いたします。
○学生支援については、各学科での学修継続困難な学生に対する多様な合理的配慮が実施されており、学科間で共有することで他学科の対応が参考となり得ることが確認されました。

6 教育環境 ○教育に必要な施設・設備は養成機関の基準に適合して整備され、学生の安全管理、および感染予防にかかる対策は適正に行われたと評価されます。 ○防災に対する体制整備（項目 37）については、車椅子対応の避難経路がないなど、学院の自己評価の「3」は妥当とされ、今後の改善（現在は車椅子利用者がいないものの、そうした学生が入られた段階での判断等）が望まれます。
7 学生の受け入れ募集 ○入学時の定員割れは顕著であり、PDCAによる見直しが必要と考えられます。 ○入学者数が一桁といった場合に、学生活動において集団の形成ができないことは修学上の制約が生じると思われます。また、卒業後のキャリア形成を明確にしてアピールすることが大事と思われ、PDCAによる学科におけるカリキュラムを含めた対応の検討が望まれます。
8 法令等の遵守 ○法令、専修学校設置基準等を遵守し、適正な運営が行われており、自己評価「4」のとおり全ての項目について適正と評価されます。
9 社会貢献・地域貢献 ○学科の教育資源や施設を活用した社会貢献、また教官による関連施設への出向や支援提供による地域貢献は高く評価され、自己評価「4」のとおり全ての項目について適正と評価されます。 ○福祉体験授業は小学校を対象とするところ、中学・高校へも広げた職業体験など将来の職業選択する上での実践的な体験により、学生募集にも関連してくることなので、さらなる拡充を推奨されました。
10 全体を通して ○自己評価について、例えば「3」であったものを「4」とする判断として、何をしたら上げることになるのか疑問があり、例えば、入学応募者の増加にむけた学科運営での「4」との評価について、今後はPDCAサイクルにより各学科での目標の設定と、目標を勘案した自己評価の実施が期待されます。
11 次年度への引継ぎ事項・その他 ○前年度の引継ぎ事項より、“学院教育については学科間で多様性があり、単年度の自己評価については、学科ごとの特色と現状を踏まえて、PDCA形式での学校評価とされることが推奨される”ことを受け、(参考－5)令和6年度PDCA指標(案)による運用についての提案が了承されました。